

【スタートカードの選出理由】

スタートカードは「自治会活動の閉鎖性」を選択。メンバーのうち一番の年配!?!と思われる方に選んでいただきました。その方は自身が現在、区長を務めている立場から「変えたくても変えられない」「昔ながらの運営」「同調圧力」を感じており、中々リーダーシップをとれないことが悩みのようです。

【物語の展開】

取り掛かりは「自治会活動の閉鎖性」をまねいている根本原因を考えてみました。起点として据えたのは身の回りで誰もが覚えのあることです。一つ目が**男性の役割意識**が高く、区の運営には相変わらず世帯主である男性が割り当てられていること。にもかかわらず、**職場環境が厳しい**ために、ゆとりをもって地域活動に臨むことができないことであると結論付けました。

それにより、次のステップ(下に降りる)として、それらの原因がまねいた現象として、いくつかのカードを並列に並べました。

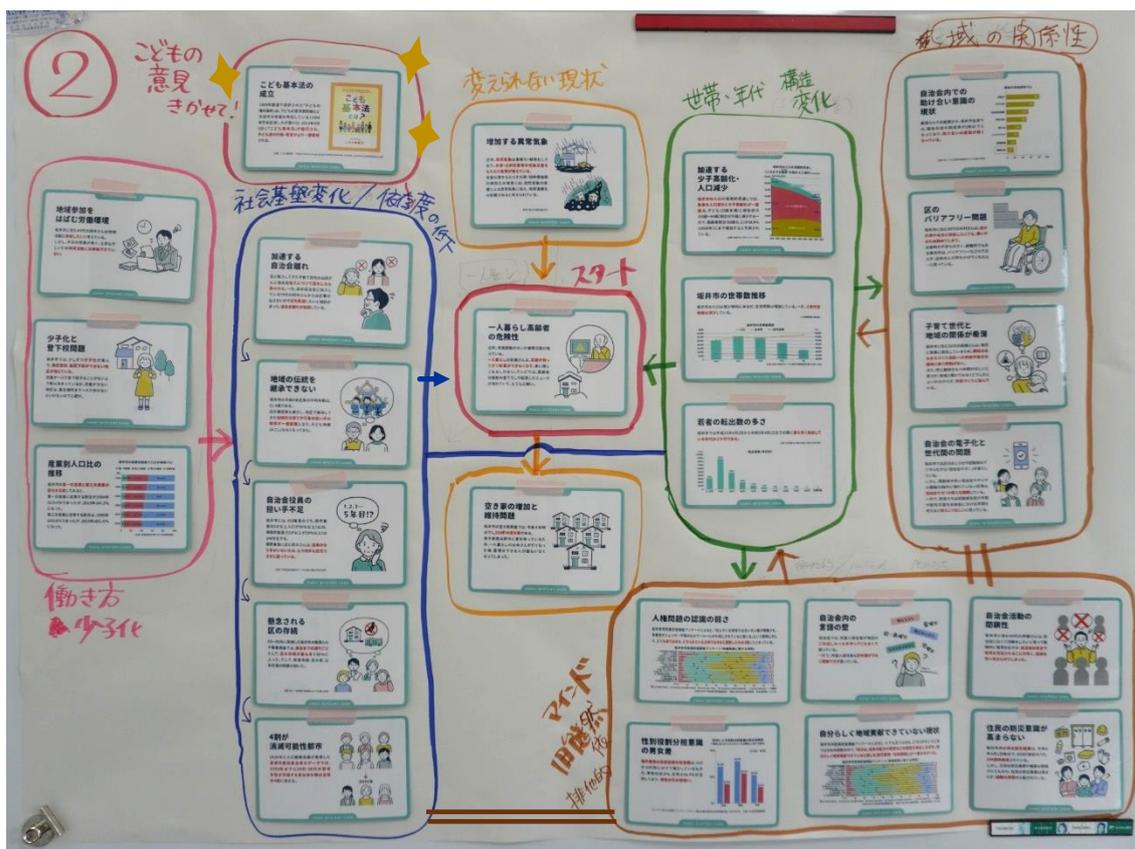
- ① 農業等の第一次産業が衰退し、サービス業等の第三次産業が増えたことで、農村集落のつながりが薄れていること。
- ② 三世同居が減り、世帯分離が進むことで、世代間が断絶してしまうこと。
- ③ 愛着はあっても地域に住むだけの強い動機がなく、若者の転出が進んでいること。
- ④ 人権に関する認識も低いままで他者への尊重や他者への良い意味での関心が失われていることが挙げられます。

地域への愛着はあっても地域に対する魅力が低下する中で、少子高齢化が進み、世代間の分断を招いています。

そして、前述の原因と現象は、自治会の閉鎖性だけでなく、地域にさまざまな課題を与えています。自治会離れが進み、一人暮らしの老人が増え、自治会の担い手が不足し、区の運営が危ぶまれてきます。さらには、空き家が増え、環境問題へと発展していきます。

【何が見えてきたか】

今後は異常気象による防災対策等の負担が増大すると区の維持どころか存続も困難になります。もはや地域内の助け合いや運営の見直し・改善だけでは手に負えないところまで来ているということが本グループの感想でした。



【スタートカードの選出理由】

スタートのカードは「一人暮らし高齢者の危険性」を選びました。メンバー全員が 60 歳代でカードの状況が他人事には思えず、また、少子高齢化が進む中、最も現実起こりえそうな近未来を象徴するカードであると考えたからです。

【物語の展開】

まず、一人暮らしである背景を考えました。大きく2つの要因が考えられます。一つは「社会基盤の変化」、もう一つは「地域の関係性の変化」です。

「社会基盤の変化」については、自治会離れが加速し、それに伴って伝統的行事の衰退や担い手不足、ひいては区の存続危機など、自治会としての機能がだんだん果たせなくなっている現状が挙げられました。

さらに、その背景として、第一次産業から第三次産業にシフトしている産業構造の変化や、忙しすぎる労働環境、それが一因となりうる少子化が影響しているのではないかと考えました。

「地域の関係性の変化」については、居住世帯や年代の構造が変わってきていること、つまり、一時的な居住といった単身世帯の増加、3世代世帯の減少、20歳代を中心とした若者の転出が多い、といった現状に注目しました。

さらに、その影響として、ご近所での助け合い意識が低かったり、同じ価値観や共通の話題でつながる関係性が希薄だったり、あるいはそれが一因となって、区内でバリアフリー化されていない場所で「助けてほしい」と頼ることができなかったり、といった状況になっていることも問題だ、と捉えました。

また、ご近所や区内の関係性の保ち方について、パソコンやスマートフォンの普及に伴って、若者はそうした機器を活用することで、出先でもタイムリーなコミュニケーションや情報収集を行いながら、常にゆるやかな関係性を維持することが可能ですが、高齢者など機器操作に不慣れな人には受け入れがたく、関係性の持ち方自体にも世代間でギャップがあることも影響しているのでは、と分析しました。

そもそも、この大きな2つの要因の根底には、「自治会活動の閉鎖性」「性別役割分担意識の男女差」「人権問題の認識の弱さ」等のカードに表れているように、排他的かつ旧態依然といった土壌があるのでは、と推測しました。

具体的には、干渉されず静かに暮らしたい、人に関わっている余裕もない、言語はおろか、意見を言ってもどうせ通らない、意向に関係なく決め打ちされる、時代が変わっているのに昔のやり方がまかり通ってしまう、性別による役割を暗黙に任されることになるのが嫌、といったネガティブな感情を、多くの人が消しきれない現状がある、と推察しました。

こんなきゅうくつな地域を、今後いかに希望が持てる地域へと転換していけるかが鍵です。

そして、この状況の対極にあるのが、「**こども基本法の成立**」です。

5年後、10年後には成人しているであろう子どもたちからも、地域づくりに関する意見をしっかり聞くこと、その意見を「排除」ではなく「受け入れていく」ことが、希望ある未来を築く鍵になるのでは、との意見でまとまりました。

【何が見えてきたか】

少子高齢化も、地球環境の変化も、歯止めをかけることは難しく、さらに、ライフスタイルの変化や価値観の多様化についても、適応していかなければならない現実です。

こうした中、一人暮らし高齢者世帯の行きつく先が「空き家」にならないように、近未来に向けて「この地域で、どう暮らすのが幸せなのか」を、部外者や行政が考えるのではなく、ここに暮らす自分たちが考えていくことの必要性も大いに感じました。

「一人暮らし高齢者の危険性」という事象について、いろんな要因がその原因となったり影響を及ぼしたりしていることや、その事象を単体で捉えて考えても根本的な課題を解決することにはならないことが分かりました。

後は外国人労働者も市内に増える可能性があるので、「言葉の壁」のような問題も今のうちから手を付けないといけないことも分かりました。

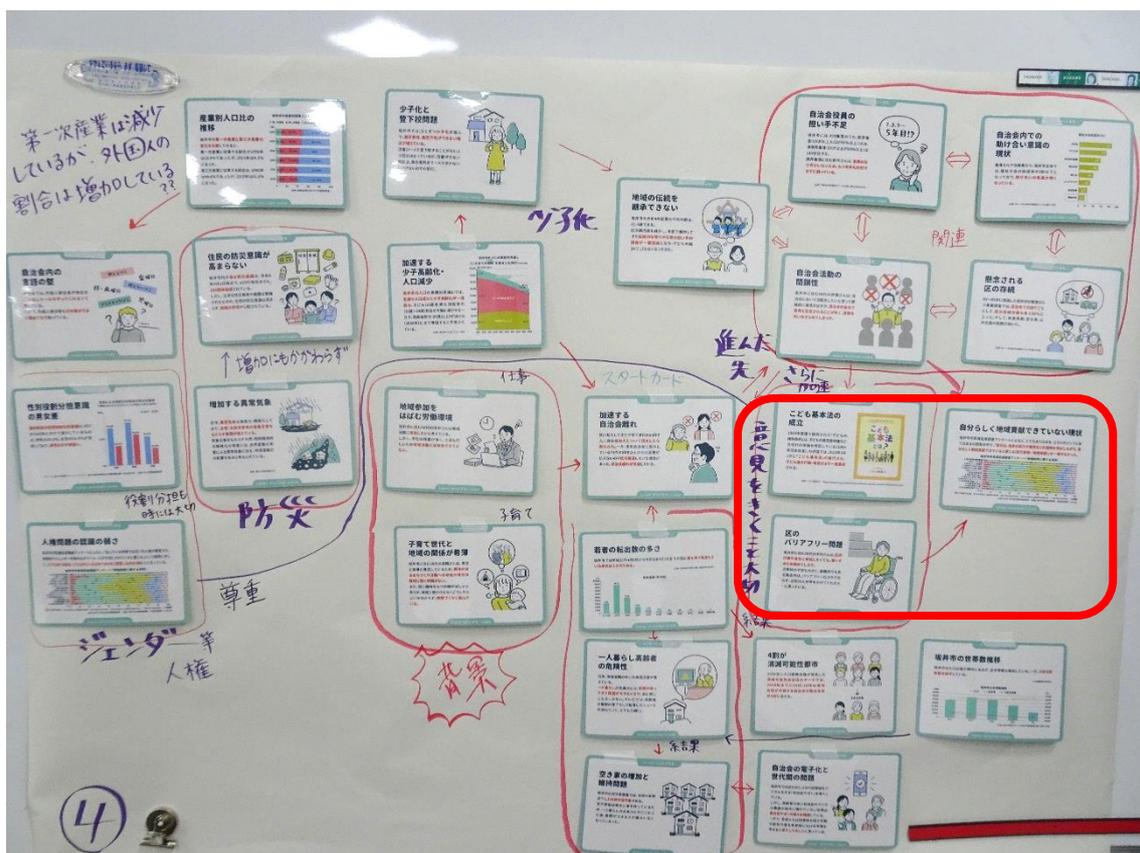
次に、自治会離れの原因を探りました。

まず、「自治会活動の閉鎖性」のカードから、意見が反対され意欲を失ってしまうことで自分らしく地域貢献できずに自治会に興味を失ってしまうことが挙げられました。意見が反対されるのは、若者との価値観の違いがあることも原因で、スマートフォンが普及する世の中で高齢の区長はついていけず理解ができないことも考えました。その中でも子どもの意見が大切であることは理解しており、価値観のギャップをどう埋めていくかが鍵です。

また、女性の区長が少ないことも話題に上がりました。今回のワークショップも参加者が全員男性で、区長もほとんどの区で男性が務めています。「人権問題の認識の弱さ」のデータ裏付けもあるように、区の仕事は男性がするという意識が根付いており、それが「自治会活動の閉鎖性」につながっていると考えました。

【何が見えてきたか】

その結果、価値観が合わない背景等ありますが、自治会があまり意見を聞かずにいると若者・女性が自治会から離れてしまい、空き家や災害、人口流出など大きな問題に発展してしまうことが分かりました。



【スタートカードの選出理由】

スタートカードは「加速する自治会離れ」を選択しました。区長さんたち自身も思い当たるところがあり、実感を持って考えられると思われたからです。

【物語の展開】

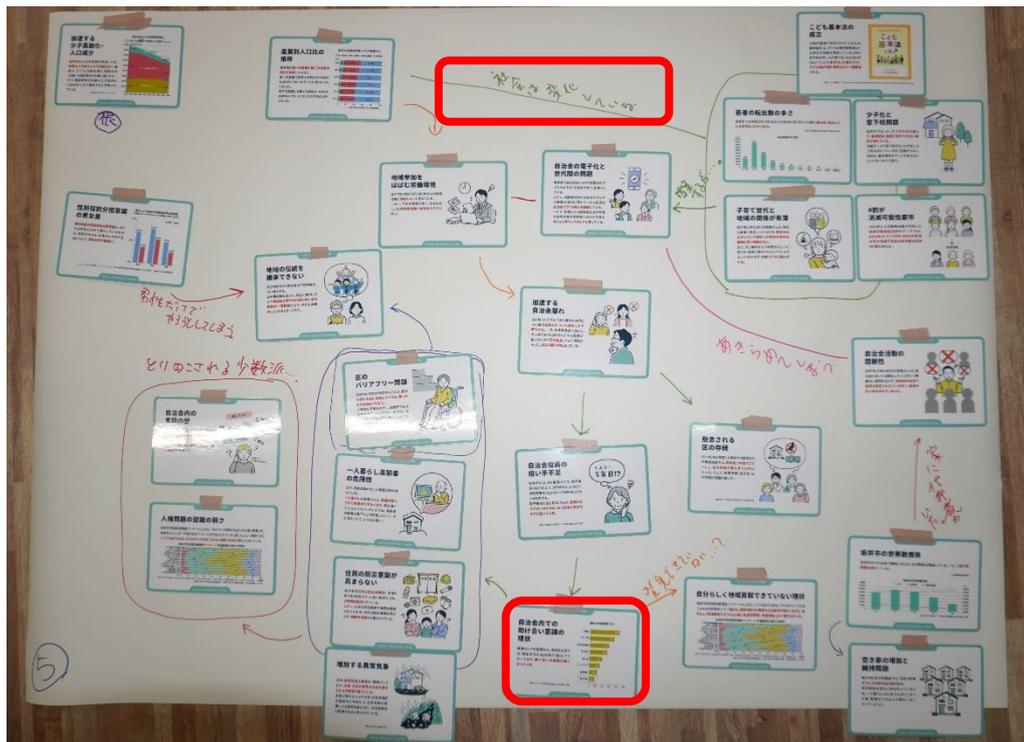
まず、自治会離れの背景を考えたところ、仕事や子育てで忙しい現状があるという意見が出ました。自治会離れが進んだ先には、自治会活動の閉鎖性、担い手不足や助け合いの精神の衰退、区の存続問題があり、その結果さらに自治会離れが進むのではないかということでした。

また、自治会の閉鎖性を打破するためや、役割分担や人権尊重のカードから、子どもや障害のある方たちの意見を聞くことも大切だということが繋がりました。意見を言うことで地域のためにできることがあると考えるきっかけになれば、自分らしく地域貢献できることにもつながりそうだという意見が出ました。

数字の裏付けからも、若者の転出が多いというところから一人暮らしの高齢者が増加したり3世代世帯数が減少したりしていること、さらに消滅可能性自治体の増加にもつながっていると分かりました。高齢者の方が多い自治会だと電子化するための若者の負担も大きくなり、なかなか進まないことにもつながるのではないかという意見が出ました。

【何が見えてきたか】

時間がなくてまとめの時間はなかったのですが、自治会離れが進んだ先の多くの問題が起こることによりさらに自治会離れが加速すると思うので、いつものメンバーだけで考えるのではなく、あらゆる方の意見を取り入れる必要があるというところが一番盛り上がりました。そして、すべてのカードがつながっているということが分かりました。



【スタートカードの選出理由】

スタートは「加速する自治会離れ」から始めました。ある参加者が直面する課題としてなじみがあるという理由で選んでいただきました。

【物語の展開】

「加速する自治会離れ」の原因を考えました。まず自治会から離れてしまっている理由として、仕事と自治会活動の両立が困難になってきていることがあげられました。第一次産業が盛んであったときは農業を通じて助け合いの関係性が今よりも強くありましたが、第三次産業が多い現代では、町外や市外へ働きに行き、仕事と地域の関係性が薄まってしまい、地域に意識をむけなくなってしまっていると推測しました。また、仕事が忙しく休日であっても地域活動に参加することが出来ず、意欲が低下していると考えました。

仕事や助け合いの在り方など社会の価値観が変化していく中で、働き世代は自治会内でのお知らせを電子化してほしい要望があるが、自治会長に言っても理解してもらえない現状もあるだろうと推測しました。ほかにも子どもの通学路の見回りや子育て世代と地域のつながりを提案しているが認められていない現状もあり、そういったことで自治会の閉鎖性を感じてしまい、提案するのをあきらめてしまうと考えました。昔は3世帯同居が当たり前でしたが、今は核家族化が進んでいます。また家に祖父母がいることで、息子や孫の想いを地区の役員や自治会長に対して祖父母が代弁することが出来ましたが、今はないため若い意見がよりいっそう提案できない状況に陥っていると考えました。

次に「加速する自治会離れ」によって生じる課題を考えました。自治会離れが進むと地区の担い手が減りその結果、助け合いの精神がなくなっていくと意見がでました。助け合いの精神がなくなると、災害時に助けを必要としている高齢者への支援や海外からの技能実習生や性的マイノリティ、障がい者への関心がなくなり、助けを必要としている人を放置してしまったり、偏見を持ってしまったりしてしまうと考えました。日頃から助け合いの精神を持つことで、地域のお祭りやイベントなどの行事の際に人材確保につながったりするだろうと考えました。

【何が見えてきたか】

ワークを通して社会構造や価値観の変化により自治会離れが加速してしまい、その結果助け合いの精神が薄れ、高齢者や障がい者、外国人などの弱者の支援ができなくなっていることが分かりました。

起こし、区のバリアフリー化が進まない一因でもあるのでは、という話も出てきました。他人への関心の薄れという点で、井戸端会議を見なくなったという話がありました。

一人暮らしが増えることで**空き家の増加**や維持問題も出てきます。ここでプラス要素として地区の空き家に**外国人が転入**してくる場合を考えました。地区に人が増え、空き家も減り、一見活気づきそうです。しかし、外国人と地区の間には言語の壁があり、自治会離れの歯止めには至りませんでした。自治会離れが助け合い意識の低迷を招き、転出者が増え、空き家が増える。そこに外国人が転入してきたとしても繋がりの形成や自治会加入には至らない、という**負の連鎖**が起こればと考えました。

この負の連鎖が繰り返されることで、2つ目の問題である「**区の存続の危機**」が引き起こされます。若者が転出してしまうことで、区内の少子高齢化が進み、役員の担い手不足や**地域伝統の断絶**など、自治会運営に支障をきたす問題が発生することが考えられました。また、**若者の転出**は**核家族化**も招き、一人暮らし高齢者の増加や集団登下校が出来ない子どもたちの増加といった問題にも繋がることが分かりました。核家族化や**働き方の変化**によって趣味や**地域活動**に割く時間が**取りづらい**ことも区の存続の危機の一因であると考えられます。

【何が見えてきたか】

そもそもなぜ自治会活動の閉鎖性が引き起こされるのか。6班では**相互尊重**が出来ていないからではないかと考えました。「自治会の電子化と世代間の問題」や「性別役割分担意識の男女差」のカードにもあるように、若者の意見が尊重されていなかったり、会合は男性が出るものといった思い込みがあったりと、そういった**人権問題の認識の弱さ**が、自分らしく地域貢献できていない現状や**自治会活動の閉鎖性**を引き起こしているのではないかという話になりました。人権問題の認識が弱いままではこども基本法にあるような、**子どもの行動・発言の尊重はできない**だろうという意見も出ました。

以上のことから自治会活動の閉鎖性の背景には**人権問題の認識の弱さ**や自分らしく貢献できない**現状**があり、そのことが巡りめぐって核家族化や区の存続の危機など様々な問題に繋がっていくことが分かりました。